

# 『覗く人』における空白

## —存在と不在の弁証法—

中 川 正 弘

『消しゴム』<sup>1)</sup>に続いて発表された『覗く人』<sup>2)</sup>は、第三作の『嫉妬』<sup>3)</sup>と共に、アラン・ロブ＝グリエの小説理論、創作姿勢を忠実に実践する作品であるとされている。

一般に、ヌーボー・ロマンの小説家達は、小説という概念自体、あるいは小説という文化そのものを問い直し<sup>4)</sup>、新たな創造の方向を模索していると言えよう。その中でもとりわけロブ＝グリエは、過去の文学に対し先鋭、過激な態度を採り、小説というジャンルの歴史を批判している<sup>5)</sup>。

その時、ロブ＝グリエは、「伝統的小説」ということばを総括的に用いて、批判の対象としているのだが、これは一般に信じられているような、過去の小説作品、作家の全面的否定なのではない。彼は小説という概念に集約される、小説の生産と消費を合わせた文学文化の中で、これまで絶対視され、その本質であるかのごとく扱われてきた、小説の表現対象となる価値、あるいはそのような価値を表現する体系を、現代という文脈の中で問題視しているにすぎないのである<sup>6)</sup>。

このようなロブ＝グリエの主張は、具体的には小説を構成する必須要素とみなされてきたものの存在意味を問い直す議論で知られている。その必須要素とは、心理を表現するものとしての「人物」と、劇性を表現するものとしての「物語」である<sup>7)</sup>。これらの要素を、小説においては今や時代遅れの不必要なものであると断じ、それらが排除された、いかにも反<sup>8)</sup>小説<sup>8)</sup>とした作品を発表している。

「物語」という小説の要素の中でも、人間の「行動」は、人間の「心理」と互いに相補関係にある。つまり人間存在の静的側面と動的側面としての不可分

の関係にあるものだという視点に立ち、「人物＝人間」を表現 (représenter) することを旨とするような小説を、現代においてもなお、十九世紀小説の反復として書く態度を、ロブ＝グリエは排斥するのである。

小説において創造とは何なのかを深く問おうとするロブ＝グリエの作品には、彼が「伝統的小説」の名の下に批判した、「人物」、「物語」の要素が確かに欠落している。そしてこの欠落が作品のスキャンダラスな特徴として論議を呼んだのである。

拙論において「空白」と呼ぶのは、さまざまな欠落、欠如、不在を総称してであるが、上に述べた欠落をまず第一の「空白」としておこう。

ここで採り上げる『覗く人』は、「物語」あるいは主人公の行動の核心部が作品そのものから排除され、作品中には実際に白紙の頁が置かれているということで、ロブ＝グリエの小説の中でも特に「空白」の意味が取り沙汰されている作品であるが、これとは別種の「空白」も比較検討することで今一度その意味を考えてみたい。

## 1. 欠落の二重性

この作品『覗く人』において欠落が重要な役目、意味を持っていることについてはロブ＝グリエ自身のことばもある。

『覗く人』、『消しゴム』、そして『嫉妬』の計画は、ある欠落に中心を置いている。(…)いずれにせよ強調するに値することは、強制的では断じてないがこれらの計画がジェネラトゥールの役目を持っているということだ<sup>9)</sup>。

この欠落とは、一般には一義的にしか論議されないのだが、それがこの作品中に置かれた白紙、空白の頁 (p. 88) であり、直接描写されることのない空白の犯罪場面に他ならない。

『覗く人』の主人公マチアスが、生まれ故郷の小さな島で時計の行商に費した時間にポツカリとあいた、この埋めることのできない空白は、時間的に一貫した流れを持たないこの作品の断片的描写から、自然な一貫性のある物語、虚

構を「再構成」しようとするれば、どうしても残ってしまう余り時間として現れざるを得ない。マチアスがこの島で犯した犯罪を、間接的にでしかないとしても断片的描写が色濃く匂わせると考えられているのだ。

さて、このような作品中に置かれた欠落、空白の場面がどのような意味を持つのかを問わねばならない。従来の『眼く人』の虚構解釈によれば、この欠落、空白はアプリアリに存在する事件が「消去 (gommer)」されていると考える点で一致している。そして、この「消去」は、罪を犯したマチアスの必然的な心理行為であると説明される。すなわち、この作品はマチアスが思い出したくない自分の犯罪を記憶から追い払おうとする物語であると解釈されることになる。

書かれてはいなくとも事件を確実に存在するものとして前提的に把え、それが消し去られ、隠されたと考えること、これは「空白」をただの「消去された存在」とみなすことであろう。

なるほど、この作品におけるこの「空白」について上のような説明がそれなりに説得力を持っていることは否めないのだが、作品の全体構造に関わるこの「空白」に加えて、ロブ＝グリエの計画には、さらにもう一つ別の意味における「空白」があるのだという指摘に注目しよう。

先に述べた虚構全体に関わる「空白」をマクロ的空白とするなら、ミクロ的空白とでも呼ぶべきものが指摘されているのだ。それは、この作品のテキストを形成する断片的描写中に現れるさまざまな「物」が、その核となる始原的イメージとして抱いている中空図形における「空白」である<sup>10)</sup>。

従来たびたび言及される「束ねられたひも」、「突堤にうがたれた窪み」、「島の周回路」の形である「8」の字、あるいは無限記号「∞」は、先に触れた空白の頁が「88」ページであることとも結びついて意味深く思えるのだが、この図形だけではなく、カシノイドとして、この図形の類が同様にテキスト中の「物」に観察されるのである。

無限記号形、並置円、円という中心が空となるカシノイド図形が、テキストのエクリチュールにおいてジェネラツールとして働き、増殖運動を果していると考えるとき、先の「消去された存在」とは別の「空白」が定義できよう。数学図形であることで、あらゆるアプリアリな象徴の意味を欠いているはずのもの<sup>11)</sup>が、それゆえに付加的意味、象徴の意味を生産しうるのである。

この「空白」は、「消去された存在」に対して「母体的不在」とでも言えよう。

- (I) マクロ的空白 —— 消去された存在  
ミクロ的空白 —— 母体的不在

以上のように、ロブ＝グリエにおける「空白」を二重の意味においてとらえ、その対立として理解するにとどめることもできようが、さらに別の「空白」の存在を考えるならこの対立を統一的にとらえることができるように思える。

## 2. 展望の欠如

ロブ＝グリエの小説における「空白」に焦点を合わせて論を進める我々が次に考慮するのは、小説における時間の問題である。

この作家の小説では時間の流れが一貫性を欠き無秩序に見えるということには既に触れたが、このような不連続性が従来 of 虚構解釈においては、実はこれこそ自然な秩序に適っているとの説明がなされている。つまり、外的現実世界の自然性にではなく、人間の内的意識時間の自然性に基づいた流れを示すものと解釈されるのだ<sup>12)</sup>

このように結論する前に、我々はこの問題を別の視点から考えてみることができる。

時間の秩序があるとかないとかという問題は、作品をその内部の閉じた空間において考える場合に生じるものであるが、これは作品に内在すべき「展望（パースペクティブ）」の有無が問われているといえよう。

ここで「展望」と言ったのは、作品内における過去／現在／未来の区分、定位、つまりはどの場面が現在なのか過去なのか決定できる基準時間という意味においてである。

このような「展望」が『覗く人』には欠けているのだ。この作品では、どの場面を見ても、その前後との結合が時間の方位を示しえないのである。これは、一見似ているフラッシュ・バックの技法とは根本的に異なっている。フラッシ

ユ・バックの場合を考えてみるなら、そこでは時間が遡行すると言えるように、作品中には主軸となり流れの基準となる時間が明らかなものとして存在し、内在的時間律と言えるものがうかがわれるのだ。この場合には「展望」が存在していると言える。

ところが、ロブ＝グリエの場合には、テキストの展開の断続性と動詞の時制の指示関係における不確実性によって、過去／現在／未来は混沌としたままなのである。細部の描写が似通った二つの場面を比べてみても、それが回想という反復なのかそれとも別の時間なのかは判然としない。

さらに、作品内世界における現実／非現実の区別、つまりモードの位相についても同様の欠如がみられるとなると、従来の虚構解釈において間接的な証拠からのみ推理される核心部分としての犯罪自体の存在性、現実性が疑問視されざるをえない。

とすれば、『覗く人』の従来の解釈においてはアプリオリに存在しているとみなされている「事件」は、このような「展望」や「モード」の欠如から見てその意味が問い直されねばならないだろう。

ところで、作品内に「展望」や「モード」が欠けているとは言ったが、角度を変えてみるなら少し違った意味で「展望」や「モード」が想定可能なのではないだろうか。それはこの作品をレクチュールの場に置いて考える場合である。レクチュールの場においては、読者は「展望」を定位し、「モード」の基準を設定する者として、絶対的現在時間を有し、現実そのものの中に存在しているのだ。作品内における過去／現在／未来、そして現実／非現実の対立を二次的なものと考え、レクチュールの現在や現実に対立させる時、欠如していると見えた「展望」や「モード」が定められるはずである。

(II) テキスト	読者
過去／現在／未来	現在*
現実 / 非現実	現実*

この時、作品中に自立的には時間の問題は生じず、現在性や現実性を問う必要はなくなる。作品外の時間や現実に対しては、いかなる現実性も非現実領域の問題でしかないからである。

以上のように考えるなら、「展望」や「モード」の欠如は、作品外から、つまり読者によって補完されるべきものとしての欠如に他ならないと言えるのではないだろうか。

### 3. 新聞記事と空白

次に考えてみたいのは、『覗く人』の中で何度か我々の注意を引きつける奇妙なものの存在についてである。それはマチアスが大事に財布の中にしまい込んでいる「新聞の切り抜き」である<sup>13)</sup>。意味あり気にその存在だけが知らされるこの新聞の断片が、いったいどんな事件を報道しているのか我々には全く知らされない。

この新聞記事が「入れ子構造 (mise en abime)」として、マチアスの犯罪を伝えていると解釈することもできようが、やはり何も知り得ないただの「新聞の切り抜き」であることに違いはない。ただし、このような解釈を誘うほどに注意を引く謎めいたものではあるのだ。

ここで、「謎」というものについて考えてみよう。何かที่ただ隠されているだけではなく、何かが隠されているかどうかさえ分らないまま想像力をかき立て続け、また忘れ去られるほどに存在性が希薄であってはならないものが「謎」であると言うことに異論がないなら、「謎」は「汲み尽し得ない不在(空白)という存在」とであると定義できよう。ここでは「空白」はあくまで強い存在性を持っていなければならないのだ。

我々は『覗く人』に現れる「新聞の切り抜き」に、読者が想像力によって埋めようとはするがいつまでも埋め尽すことができない「空白」を見る。また作中で挿入的に何度となく繰り返されるフレーズ「彼はこの物語をよく聞いた。」<sup>14)</sup>で言う「この物語」も同様に「謎」の効果を強く示す「空白」の提示と言えるだろう。

### 4. 「深み」の欠如、「表面」

ロブ＝グリエの文体の「表面性」については既に議論され尽した観がある。しかしこのことばを「深みの欠如」と言い換える時、これまでに論じてきたこと

と同じ問題が浮かび上がってくる。

従来、「表面性」の問題が「視覚性」の問題としてとらえられ、視線の主体（見るもの）と対象（見られるもの）との関係において扱われがちだが、この場合には見落されそうなものが『覗く人』の中には存在している。はたしてロブ＝グリエの表面世界は、見えることで安定を得ているだろうか。

この作品にはオブセッションのように頻繁にカモメが登場する。カモメはいろいろに描写されるのだが、その中に、止まったまま身動きしない真横から (de profil) 見られる場面がある。この時カモメは、嘴から足先、尾羽まで隔々までよく見えながら「しかしまだ何か欠けているような感じがする」<sup>15)</sup>のである。

全てが完全に見えていながらなお感じられる欠落とはいったい何を意味するのだろうか。我々は見ることにおいて、見えるもの以外にまだ別の物を考えねばならない。

カモメが真横から見られる時、「唯一見える右足が丁度もう一本の足を隠している」ように、プロフィールというアングルは、見せながら隠すという特異な効果を持っている。この時、可視の物が不可視の物の存在を際立たせる。

下に並べた二枚の肖像は、描写のアングルが持つ効果の違いについて教えてくれる。これらはどちらも同じように写實的に描かれながら明らかに見え方において異なる印象を与えるのだ。

### (Ⅲ) 描写とプロフィール<sup>16)</sup>



(A)



(B)

(A)は肖像画としては一般的なアングルと言える。この場合描写はある種の充足感を与えるであろう。つまりこのアングルから見た時、実際にはこちら側の半面しか見えなくとも、向う側にある死角が気にならず、まるで全ての角度から見えているような感じがするのである。この肖像を見た後、視線を他に向けても容易に正面からの見え方、真横からの見え方が想像できるのだ。右の(B)と比べてもポイントとなる顔の道具立てとしては、向う側の目も見えるという違いしか存在しないにもかかわらずである。この場合、見える物だけで安定し得ると言える。

それに対して(B)は同じく写實的に描かれているにもかかわらず、何か欠落しているという感じがありはしまいか。このアングルからは向う側に隠れた目が見えないだけでなく、また正面から見た表情が想像し難いだけでなく、顔の片側だけを見せているこの女性には顔の向う側は、単に見えていないというのではなく、存在していないのではないかと、戦慄さえ覚えさせる。そしてこの可視の部分はその存在性を強く主張するのに比例して不可視の部分の「空白」がその不在性を強め、これを見る我々の目を引きつけるのである。

このように肖像のアングルによって決まる描写の印象、効果の違いを考えるなら、ロブ＝グリエの描写の表面はプロフィールの肖像と同様に、存在自体がそれと裏腹の不在を際立たせるという質を持っているのではないかと、カモメのプロフィールから思い至るのである。表面の可視性は、死角、深みとなる部分の不可視性との緊張によって、表面に向う者の意識を表面の向う側へと誘うのである。このように考えるなら、実はこの不可視のものこそが視野や意識の真の対象であり、可視表面は背後の空白への閉ざされた窓となっているとも言えるだろう。

## 5. 欠落と緊張、存在と不在

『覗く人』に見られるいろいろの欠除、欠落、空白についてのこれまでの考察から明らかなように、そのいずれも単純に何かが削られているとか、虚無という不在が提示されていると言い切ることはできない。

ロブ＝グリエの小説における不在の意味が、現象学や実存主義の視点から問われるとき、この不在は虚無という形而上の意味付けをほどこされ、悲劇への



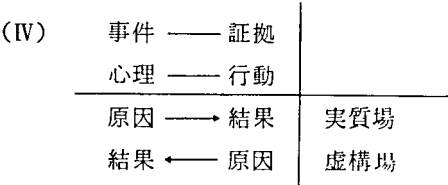
昇華が企てられもした<sup>18)</sup>。あるいはまた、既に指摘したようにこの作品の核心的事件や主人公の心理の説明法そのものが示すように、不在や空白はあるアプリアリな存在が消されたものとして表現されているとする解釈も存在している。

この作品を読む者が向かい合う空白とは、はたして絶望の暗い淵のような虚無なのか、それとも隠されてはいるが容易に窺い知れる実体の痕跡なのであろうか。

存在と不在が、表面と深み、書かれたものと、テキストの欠落という対立の中で見せる強い緊張を考えると、不在が表現の対象であるとする先の二つの態度が、いずれもテキストという直接存在を二次的な表現媒体としかみなしていないことに問題が感じられる。

とはいえ、それとは逆に存在の側だけを強調し、見られる表面だけを問題とし、不在の側を忘却したり二次的なものと考えられることにも同調することはできないのである。存在と不在は切り離して別々にとらえられるべきではなく、存在の強さ自体が不在を際立たせ、不在のあること自体が存在の強さを生んでいると考えるべきではないだろうか。

作中のあらゆる空白部分を意味化することで行なわれる虚構解釈は、事件や人物の心理を隠されてはいるが実体であると説明するのだが、事件や心理とはそれらが原因となり、存在部分に証拠や行動という結果を生むのではなく、存在部分が原因となって不在の事件や心理は推理や解釈という行為によって生まれる結果なのだと思えるべきではないだろうか。現実世界において犯罪事件が原因となり結果として証拠を生むと確かに言える反面、証拠と見えるものさえあれば事件は作り上げられもすることを考えるなら、ロブ＝グリエの小説における存在と不在は後者のごとく存在部（テキスト）を端緒に不在部にある事件や心理を読者に作りあげさせるものと言えよう。それは従来の解釈がまさしく虚構を築くように不在の事件を作り上げ、作品そのものとは別の形態をした世界を生んでいること自体からも明らかであろう。



そしてこのような虚体としての事件や心理を作り上げることが人間の想像力や文化による解釈に他ならず、虚構とはまさしく実体化され得ないこの行為であることをロブ＝グリエの小説は教えてくれる。

## 6. 結 語

ロブ＝グリエの小説における「空白」の意味、機能を考えることで我々は、「存在と不在の弁証法」とでも言うべき図式に到達した。またこのことで小説のテキストが表現 (représenter) するということと提示 (présenter) するということの違いが明らかになるだろう。

そしてこの二つのテキスト機能の違いを、サンボルによる構築とシーニュによる構築と言い換えるなら、この作家が意図する小説のテキストと虚構が、シーニュと指示物の自由な関係の中で戯れるものであるとすることができる。<sup>19)</sup>

## 註

- (1) *Les Gommages*, Les Editions de Minuit, 1953.
- (2) *Le Voyeur*, Les Editions de Minuit, 1955.
- (3) *La Jalousie*, Les Editions de Minuit, 1957.
- (4) Natalie SARRAUT, *L'Ere de soupçon*, Gallimard, 1956.
- Michel BUTOR, *Répertoire*, Les Editions de Minuit, 1960.
- (5) Alain ROBBE-GRILLET, *Pour un nouveau roman*, Les Editions de Minuit, 1963.

(6) *Ibid.*, p. 45, « Nature, humanisme, tragédie »

この文題自体がロブ＝グリエにとって過去の文学が立脚する価値体系の総括となっている。つまり « nature » を備えた人物が « humanisme » の視点から見られる世界において « tragédie » を演じるのが表現対象となるというのである。

(7) *Ibid.*, p. 25, « Sur quelques notions périmées »

- (8) 一般に « anti-roman » という概念と « nouveau roman » という概念が混同されがちだが、前者が « roman » を一元的にとらえた場合の対語であるの

に対して、後者は統合的意味での ≪roman≫ ではなく ≪roman traditionnel≫ に対応させて理解せねばならない。つまり小説創造の背景となる文学文化の中に安住し、伝統化、不活性化してゆく小説の側面を問題視しているのである。

(9) Alain ROBBE-GRILLET, *Le Monde*, 16 janvier, 1976.

(10) Alain GOULET, *Le parcours moebien de l'écriture Le Voyeur*, Archives, 1982.

(11) 「8」字形は無限の運動を、並置円は目を円は終焉を象徴し得る。

(12) Bruce MORRISSETTE, *Les Roman de Robbe-Grillet*, Les Editions de Minuit, 1963.

(13) 一例として ≪Mathias plongea la main dans la poche intérieure de sa veste et en retire le portefeuille. Il y prit *la coupure de journal* et, après avoir rangé le portefeuille, relut le texte attentivement, une fois de plus, d'un bout à l'autre.≫ (イタリックは引用者)

(14) *Ibid.*, p. 9, 18, 145, 163, 230. ≪On lui avait souvent raconté *cette histoire*≫ (イタリックは引用者)

(15) *Ibid.*, p. 22, ≪On a l'impression, cependant, qu'il lui manque encore *quelque chose*.≫ (イタリックは引用者)

(16) *Ibid.*, p. 231. ≪La patte droite, seule visible (masquant l'autre exactement) est ...≫

(17) Leonard DA VINCI (A) 「ある音楽家の肖像」 (B) 「ある婦人の肖像」

(18) Olga BERNAL, *Le Roman de l'absence*, Gallimard, 1964.

(19) ≪symbole≫ は記号による表象の必然性に基づき、≪signe≫ は記号として自立的に指示物とは自由な関係を持ちうる。